

中国・ロシア国境地区における局地的交流と人口変化

平泉秀樹

一九九〇年代のはじめから中口国境を挟んだ大都市間で、貿易の急激な増大や国境地区住民による大量の越境現象（以下「局地的交流」と呼ぶ）がみられるようになった。特に、多数の中国人が人口希少なロシア国境地区に押し寄せたことは、そこでの中国人の存在感を急激に高め、ロシア社会に緊張をもたらした。ロシア国境地区に大量の中国人が流入する背景には中口国境地区の間に極度の人口格差があり、それが中国からロシアへの流出圧力として働いているためである、といわれている。本稿は、一九九〇年代以降の中口国境地区における局地的交流の現状を概観するとともに、国境両側地区の人口変化が今後の中口国境地区間における局地的交流にどのような影響を与えるのかを考察する。

●本稿の対象地区

中国とロシアは、モンゴル国を挟んで西部と東部で国境を接している。その距離は四三―四キロにおよび、その圧倒的な部分は東部国境にある。中国側でロシアと直接に国境を接しているのは、西部国境地区では新疆ウイグル自治区（五四キロ）のみであるが、東部国境地区では内蒙古（モンゴル）自治区（二〇―二〇キロ）、黒竜江省（三〇三―八キロ）および吉林省（二二―二キロ）で国境を接している。他方、ロシア側ではゴルノ・アルタイ自治管区、チタ州、アムール州、ユダヤ自治州、ハバロフスク地方および沿海地方が中国と国境を接しているが、国境の大部分はロシア極東地域に含まれるアムール州、ユダヤ自治州、ハバロフスク地方および沿海地方にある。東部国境線の多くは河川（額爾古納河＝アルゲン河、黒竜江＝アムール河、烏蘇里江＝ウスリー河）や湖（興凱湖＝ハンカ湖）などの水面上にある。

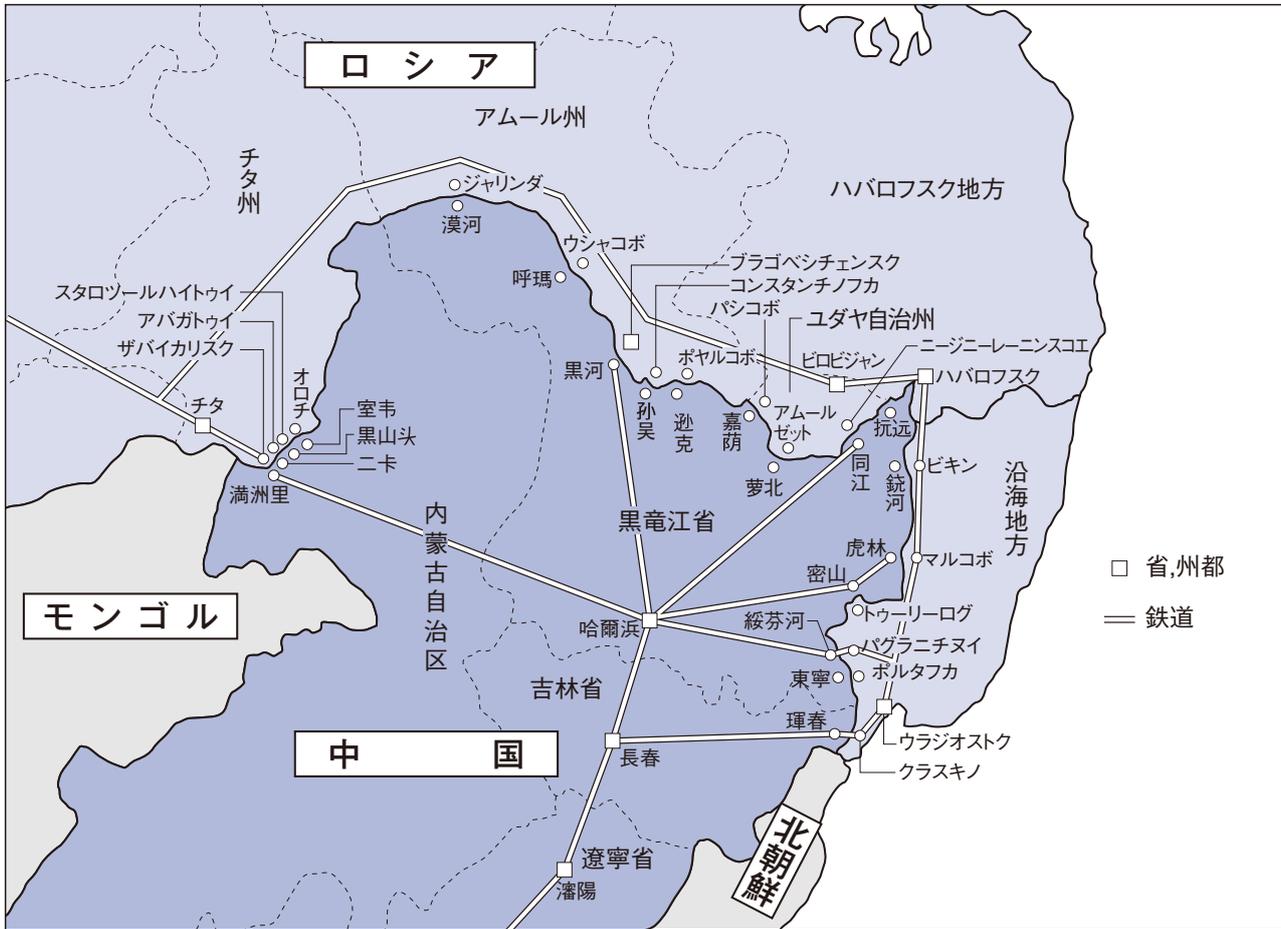
本稿では、中国側については東部国境線の七割以上を占める黒竜江省の国境地区（大興安嶺、黒河、伊春、鶴崗、佳木斯、双鴨山、

鶏西、牡丹江）を対象とし、この地区を「黒竜江省国境地区」と総称する。一方、ロシア側についてはロシア極東地域の中で中国と直接に国境を接しているアムール州、ユダヤ自治州、ハバロフスク地方および沿海地方を対象とし、この地区を「ロシア極東国境地区」と総称する。なお統計の都合上必要な場合には、黒竜江省全体を対象とすることもある。

中口国境線の両側には、数多くの指定された通行点（中国側では「口岸」、ロシア側では“пункт пропуска”＝ППと呼ぶ）が開かれ、税関、検疫所などが整備されている。局地的交流はこの口岸を通して行われている。

黒竜江省国境地区とロシア極東国境地区には空港をのぞいて一五対の相互に開かれた口岸（ПП）がもうけられているが、その多くは（一〇カ所）上記国境河川沿いにある。河川口岸（ПР）は、河川が結水しない時期は船舶で、結水する時期は自動車による氷上輸送で結ばれている。陸路の通行点が開かれ、自動車や鉄道で結ばれているところは数少ない（五カ所）（図1参照）。

図1 中口国境地区と口岸



(出所) 筆者作成。
 (注) 地名表記は、日本語表記を原則としたが、日本語文字がない場合は、中国語表記を使用した。

● 中口国境地区における局地的交流

① 局地的交流の歴史

一九九〇年代以降、中口国境地区の小都市間で経済的、人的交流が急速に拡大している。それ以前、一九五〇年代半ばから六〇年代初めにかけて黒竜江省黒河市とアムール州ブラゴベシチェンスクの間で、政府間協定に基づいて双方の公営貿易機関による貿易が行われていた。この時期の貿易は、商品価格を振替ルーブルで算定し、原則として等価の物々交換であった。

その後、中口国境地区での貿易は国家関係の悪化により一度中断したが、一九八〇年代の初めに国家関係が改善されるとともに、中国で改革開放政策が実施されるようになると、再び協定貿易が行われるようになった。一九八二年の政府間協定によって、今後の地方間貿易は、貿易方式は物々交換とし、計算単位はスイスフラン、商品価格は原則として当時の国家貿易協定の設定価格を用いることとされた。また双方の貿易口岸は、中国側は黒竜江省綏芬河と内モンゴル自治区滿洲里、ソ連邦側は沿海地方クドコボとチタ州ザバイカルスクに定められた。その後一九八七年以降、黒竜江省黒河とアムール州ブラゴベシチェンスクの間でも貿易が再開された。

一九八〇年代までの国境地区間の局地的交流は公営貿易機関による貿易に限定されていたが、一九九〇年代にはいと貿易機関ではなく、企業間の取引がなされるようになった。また国境地区住民が相互に越境して取引をすることがありふれた姿となり、人的交流も急激に拡大した。この時期、経済的、人的交流が急速に進展したのには中口双方に関係する要因があった。経済的交流については、ロシアではソ連邦の解体・消滅によって、特に中国東北地区と国境を接している極東地域の経済が混乱し、地域住民の生活必需品を国内調達することが困難になったこと、またソ連邦時代に行われていた貿易の国家独占が廃止され、企業が自由に外国企業と取引することができるようになったことがある。一方、中国では一九九〇年代初めになると、一九七〇年代末から開始された改革・開放政策が国

表1 中口国境地区における貿易総額推移
(単位：億米ドル)

	黒竜江省総額	対ロシア	国境地区
1991	20.1806	8.487	
1992	28.8083	17.3081	
1993	32.9913	18.9344	
1994	24.256	8.0082	
1995	23.8645	7.0265	
1996	24.4922	8.0257	
1997	24.6298	7.9306	
1998	20.1047	6.697	7.9122
1999	21.9127	9.167	10.3372
2000	29.862	13.7178	15.9452
2001	33.8454	17.9891	19.6168
2002	43.4934	23.3268	25.1366
2003	53.2964	29.5505	32.553
2004	67.9204	38.2298	44.5547
2005	95.7216	56.7643	64.4085
2006	128.5729	66.8693	94.2626

(出所)『黒竜江省統計年鑑』各年版より作成。

境地区にまで拡大され、その一環としてロシアとの国境四都市(満洲里、黒河、綏芬河、琿春)の開放政策が実施されたことがある。一方、人的交流については、一九八八年に、国境地区住民は相手国のビザがなくても国境を通過することができる、ということを中心とした政府間協定が締結され、これが事実上国境を開放することにつながったことが交流拡大に大きく作用した。

② 経済的交流(貿易)

現在、中口国境地区間では貿易、投資、労務契約など様々な形態の経済的交流が行われているが、そのなかでも貿易は国境地区経済にとって最も重要な交流形態である。

黒竜江省の対ロシア貿易は、一九九〇年代初めには大きな増加を示したが、その後一旦縮小した。しかし、二〇〇〇年以降再び急激に増大している(表1)。貿易総額についてみると、貿易がもつとも縮小した一九九八年の六億六九七〇万米ドルから二〇〇六年の六六億八七〇〇万ドルへとほぼ一〇倍に拡大し、貿易総額に占める対口比率も三三・三%から五二%に増大した。黒竜江省の貿易に占める対口比率は一九九八年以降毎年増大し、二〇〇五年には最大の五九・三%にまで達した。

黒竜江省国境地区の貿易額も同時期に急激に増加するとともに、黒竜江省全体の対口貿易総額を大きく超過するようになっていく。黒竜江省国境地区の貿易は、多くが口岸を通じて行われていることから、対口比率は黒竜江省全体の比率に比べて大きいと考えられる。例えば、黒竜江省最大の対口口岸がある綏芬河市では二〇〇四年の対口貿易比率は八五%に達しているが、黒竜江省全体では五六・三%であった。黒竜江省国境地区の貿易総額と黒竜江省全体の対口貿易額の差が前者に有利に拡大していることから、黒竜江省国境地区では対口貿易が伸びているとともに、他の国々との貿易も拡大していると考えられる。

③ 人的交流

一九九〇年代初めには、多くの中国人が荷物を担ぎ、国境を越えてロシアに入り、その地で商いをするということが各地でみられた。またその逆に、ロシアの商人が中国の都市に商品買い付けにくることもあった。この時期の人的交流の姿を数字で把握することは難しいが、一説では一九九〇年代初め、沿海地方の国境の町バグラニチヌイ地区(対応する中国の町は綏芬河市)では、そこに居住する中国人の数はロシア住民に匹敵するほどであった、といわれている(http://www.ruseconomy.ru/nomer4_200110/ec23.html)。

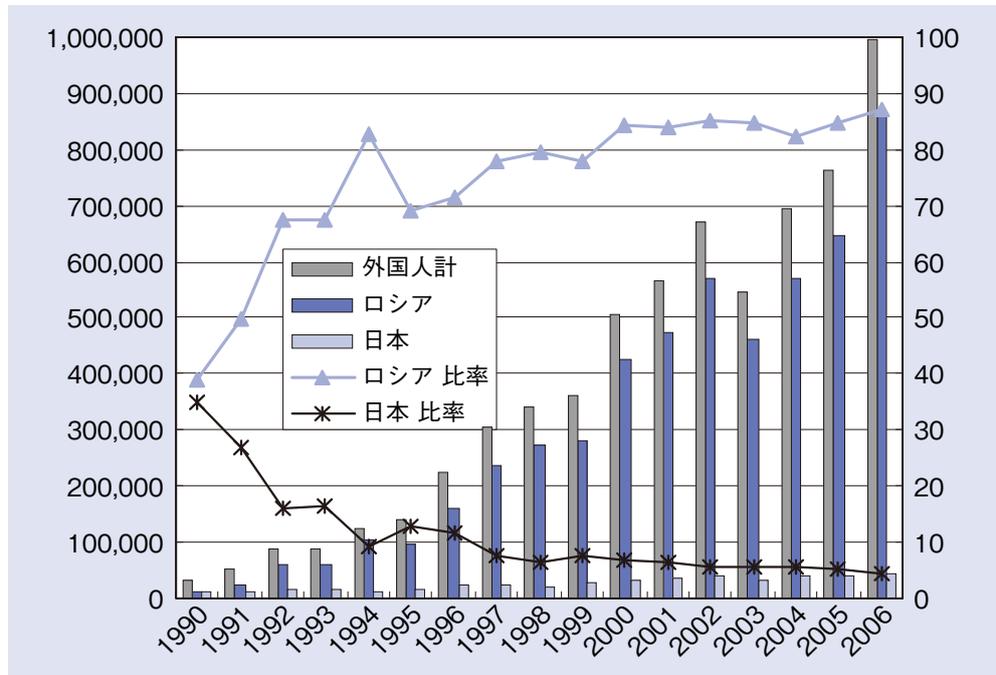
黒竜江省もしくは黒竜江省国境地区とロシア極東国境地区の間の人的交流を明示できるような統計はないので、黒竜江省および黒竜江省国境地区の外国人観光客統計を利用して、人的交流の姿を概観してみよう。中国とロシアは一九九二年にビザなしグループ旅行に関する協定を締結し、一定の条件の下でグループ旅行を行う両国国境地区住民はビザなしで相手国に入国できるといふ制度を定めた。ほとんどのロシア極東国境地区住民はこの制度を利用して中国に入国しているが、その実態は観光名目のショッピングであり、外国人観光客の数は局地的交流の概要を示しているといえる。

一九九〇年に黒竜江省が受け入れた外国人観光客は三万四〇〇〇人弱であり、そのうちロシア人は一万三〇〇〇人(外国人受け入れ

の約四〇％)であったが、二〇〇六年には外国人観光客は九九万五〇〇〇人に増加し、ロシア人は八六万六〇〇〇人(外国人受入数の八七%)に達した(図2参照)。黒竜江省黒河市では口岸対応窓口は、アムール州の州都ブラゴベシチェンスク市)を通して入

図2 黒竜江省への外国人観光客

(単位:左目盛り一人、右目盛り一%)



(出所) 表1と同じ。

国した者は、一九九九年の六万八〇〇〇人から二〇〇五年には二四万四〇〇〇人に達した。このような黒竜江省もしくは黒竜江省国境地区への大量の外国人(その大多数はロシア人観光客である)の流入の増大は、口岸地区の観光収入、ショッピングの増大につながり、これら地区に大きな経済効果をもたらしている。ちなみに黒竜江省の観光収入は一九九五年の六〇六二万米ドルから二〇〇六年には四億九三三万米ドルにまで増大した。

● 黄禍論

中口国境地区間における経済的、人的交流の急激な拡大は、ロシア国内に緊張を呼びおこした。ロシアでは、ソ連邦の解体後、旧来の国内地域間経済関係が崩壊し、それまでソ連邦構成共和国やロシア中西部との交易に支えられてきた極東地域の経済体系は根底から覆された。そのため、ロシア極東地域は近隣諸国との経済関係強化に活路を見いだす以外に方法はなかった。特に、ソ連邦の経済体制の中で、ロシア極東地域の経済構造は資源型重工業に特化し、住民の日常生活必需品は遠くの地域から運ばれていたため、国内経済関係の崩壊は住民生活を極度に困難にした。このような状況の中で、ロシア極東国境地区では中国から商品を担いで極東地域で販売するにわか商人の数が急激に増加した。局地的交流の進展は、極東地域住民に生活物資を補給するという点ではロシア極東地域住民の肯定的な評価を得ることができたが、その一方で人口が減少しているロシア極東地域における中国人の存在感が増大したことは、ロシア社会に緊張を生み出し、中国による「静かなる拡張」、「黄禍」であるとも叫ばれるようになった。

確かに、先に例を挙げたように一九九〇年代初め以降、それまで中国人がいなかったロシア極東地域の小さな町にも大量の中国人が押しかけるといふ状況が見られたが、それは一九九〇年代を通して加速的に増大するといふほどでもなかった。また、一九九〇年代の初めにロシア社会に緊張を呼び起こし、「黄禍」論を叫ばせた、ビザなし入国制度による中国人の大量流入とこれら中国人の違法な長

期滞留という問題も、ロシア側当局の措置により改善され、不法滞在はほぼなくなっている。

しかし、やはり人口希少な極東における中国人の存在感は大きく、ロシアの一部の政治家やマスメディアは、このような状況を大々的に取り上げ、シベリアや極東地域が中国に奪還されるとの危機感をセンセーショナルに喧伝し続けている。また、「静かなる拡張」は中国政府の暗黙の政策であるともいわれた。ある者によれば、ウラジオストックからブラゴベシチェンスクまでの地域（本稿の対象地区である国境地区にほぼ対応する）に約七〇〇万人の中国人が住んでいると云う（<http://www.forumnskr.ru/files-ni/990723185712.html>）、あるいは沿海地方の住民二五〇万人のうち四〇〇万人が中国人だという（<http://www.Prinanevnews.ru/news/news/2002/3/4/7577.html>）。移民を研究するロシア専門家の評価では、このような数字はロシア極東地域の人口規模からして全くの「神話」にすぎないが、「神話」に基づいた黄禍論、脅威論は中央政治においても大きな影響を与えた。プーチン大統領（当時）は、二〇〇〇年に極東地域を視察した折、「この地のロシア人は数十年後には主として日本語、中国語、朝鮮語を話しているだろう」と述べ、二〇〇二年にも「大量の不法移民が極東住民の雇用を奪っている」と述べている。このような、ロシア国内での危機感をもとに、二〇〇七年には外国人（その対象は特に中国人と目されている）がロシア国内で小売業に従事することを禁止する法律が制定された。また、中口政府間で締結されたビザなし入国制度の廃止や、有効期間短縮の動きも報じられている。

中国人の大量「移民」は神話であるとしても、人口希少な極東地域における中国人の存在感はやはり大きく感じられる。このように中国人がロシア極東国境地区に大量に流入する大きな要因の一つが、中口国境地区における人口の不均衡による流出圧力であるといわれている。そこで、次に中口国境地区における人口状況を検討することにする。

●中口国境周辺地区における人口状況

①人口推移

中口国境を挟んだ両側地域における人口変化のベクトルは、相反している。極東地域全体の人口は、一九九一年初め（推計人口八〇六万六〇〇〇人）をピークとして、二〇〇七年初めには六五〇万九〇〇〇人にまで減少した。極東地域の人口は中国との国境地区（南部地区）に集中しており（六八・七％、二〇〇七年初め）、北部地区に比べて人口減少率は小さいものの、やはりこの間五二〇万一〇〇〇人から四四七万二〇〇〇人へと七三万人も減少した。これとは対照的に、黒竜江省の人口はこの間三五四三万人から三八二三万人へと、二八〇万人も増加した。

中口国境地区の人口を数字で比較することができる一九九四年以降、二〇〇六年までの一三年間に黒竜江省全体では一五一万人、黒竜江省国境地区では四〇万六三〇〇〇人の人口が増加したが、極東国境地区では五六万五〇〇〇人も減少した（表2）。

一九九〇年代以降の時期が国境を接する地区にとってどんな時期であったのかを、地域総生産と貿易を用いて簡単に振り返っておく。黒竜江省国境地区の地域総生産データはないため、比較の都合上ここでは黒竜江省とロシア極東地域を比較する。一九九七年を一〇〇とした時、二〇〇五年にはロシア極東地域は一三二・二であったが（全国は一五二）、黒竜江省は二〇八・四（全国は一九八・六）であった。一方、貿易についてみると、ロシア極東国境地区は一九九八年の二一億九〇二〇万米ドルから二〇〇五年の六九億・三三三〇万米ドルへと、金額にして四七億・三三二〇万米ドル、率にして三・一六倍増加したのに対し、黒竜江省国境地区は七億九一二三万米ドルから六四億四〇八五万米ドルへと、金額にして五六億四九六三万米ドル率にして八・四倍増加した。さらに二〇〇六年の黒竜江省国境地区貿易額は極東国境地区のそれを上回った（それぞれ九四億・二六六万米ドル、八六億七〇〇〇万米ドル）。つまり、生産においても貿易においても、ロシア極東地域は黒竜江省に比べて発展が遅れていたこと

表3 人口変化の要因

(単位：万人)

	黒竜江省国境地区		ロシア極東国境地区	
	自然増加	社会増加	自然増加	社会増加
1992				
1993				
1994	8.2	2.9		
1995	7.9	-1.1	-1.68	-4.12
1996	7.6	3.4	-1.95	-3.75
1997	6.9	-0.8	-1.81	-3.89
1998	6.2	-4.0	-1.52	-3.98
1999	6.0	-0.3	-2.28	-4.12
2000	6.7	4.5	-2.44	-2.56
2001	6.3	-1.9	-2.28	-3.82
2002	5.1	-1.6	-2.31	-1.89
2003	3.5	-7.4	-2.30	-0.80
2004	4.5	-1.7	-2.25	-0.75
2005	3.0	-13.4	-2.48	-0.82
2006	4.0	-2.7	-1.84	-0.86
2006-1995	67.7	-27.0	-25.1	-31.4

(出所) 表1と同じ。

表2 国境周辺地区の人口推移

(単位：万人)

	中国黒竜江省		ロシア極東地域	
	全 域	国境地区	全 域	国境地区
1992	3608			
1993	3640	1269.3		
1994	3672	1280.37	751.8	503.7
1995	3701	1287.1	736.0	497.9
1996	3728	1298.1	724.8	492.2
1997	3751	1304.2	713.7	486.5
1998	3773	1306.4	702.7	481.0
1999	3792	1312.6	691.3	474.6
2000	3807	1323.3	683.2	469.6
2001	3811	1327.7	674.3	463.5
2002	3813	1331.2	668.0	459.3
2003	3815	1327.36	663.4	456.2
2004	3816.8	1330.14	659.3	453.2
2005	3820	1319.7	654.7	449.9
2006	3823	1321	650.9	447.2
2006-1994	151	40.63	100.9	-56.5

(出所) 『黒竜江省統計年鑑』および『Российский статистический ежегодник (ロシア統計年鑑) 各年版より作成。』

がわかる。ロシア極東地域の経済は一九九九年以降プラス成長を続けているが、依然として全国の発展に比べて遅れを示している。これに対して黒竜江省の経済は、この間全国の成長率を上回って成長している。

②人口変化の要因

極東地域の人口は、経済が一九九九年以降プラス成長を続けているにもかかわらず、依然として毎年減少し続けている。そこで、黒竜江省国境地区とロシア極東国境地区ではどのような人口的要因によって人口変化が生じたのかを検討する(表3)。

黒竜江省国境地区では一九九四年から二〇〇六年の間に四〇万六〇〇〇人の人口増加があったが、人口変化の要因としては、出生数と死亡数の差である自然増加が六七万七〇〇〇人増加したのに対し、人口の流入と流出の差である社会増加は二七万人減少した。一方、ロシア極東国境地区ではこの間五六万五〇〇〇人の人口減少があり、人口変化の要因としては、自然増加も社会増加も純減であった(それぞれ二五万一〇〇〇人、三二万五〇〇〇人)。人口の純流出は国境の両側で認められるが、黒竜江省国境地区では純流出人口を上回る自然増加があるのに対し、ロシア極東地域では自然増加も純減であったことが、両国境地区における人口変化ベクトルの違いとなって現れた。ロシア極東地域の自然増加が純減になったのは、一九九〇年代に入り死亡率が急激に上昇(一九九〇～二〇〇一年、六一%)する一方、出生率が低下(三六%)し、出生数と死亡数に逆転現象が起きたためである。

黒竜江省国境地区でも人口の純流出は起きているが、他地方からの出稼ぎなどのような流動人口は地区常住人口には含まれていないため、実際の居住人口は公表されている統計数字より多い。黒竜江省国境地区の流動人口がどのくらいあるのかを示すデータはないが、ロシアとの国境貿易が盛んな内モン古自治区満洲里市では二〇〇六年の常住人口約一六万人に対し、流動人口は五万人ほどであった。これら流動人口の六五%は国境(小額)貿易、飲食業および商業など

ロシア人を相手とする産業に従事している。このことから、対ロシア貿易が盛んな黒竜江省国境地区でも定住人口に現れない流動人口の存在があり、それがその地区人口にとって比較的大きな比重を占めていると推察することができる。

●まとめと若干の展望

中ロ国境地区における局地的交流は経済（貿易）の面でも人的交流の面でも拡大しているが、両地区における人口状況は相反している。黒竜江省国境地区では人口の純流出がみられるが、全体として地区人口は増大しており、その要因は人口の自然増加である。これに対し、ロシア極東地域では自然増加の純減と人口の純流出による二重の減少効果によって、全体として人口が減少している。

中国によるロシアへの「静かなる拡張」や「黄禍」論は、国境両側地区における大きな人口格差が圧力となって過剰人口の中国から過少人口のロシアへと人口が流れ、大量の不法移民がロシアに滞留している、ということをも一つの論拠にしている。国境両側地区の人口状況を検討した結果、この地区での人口格差はますます拡大していることがわかったが、このことから直ちに今後、中国国境地区からロシアの国境地区への人口流出はますます増加する、ということとはできない。近年、ロシアではビザなしグループ旅行に対する管理の強化や外国人がロシア国内で小売り業務に従事することを禁止するなど、中国人に対して入国管理を強化している。このため、中国人の不法滞在はほぼみられなくなり、市場から中国人の姿が見えなくなったといわれている。従って、一九九〇年代初めに「黄禍」論を引き起こした大量の不法滞在者問題は、第一義的にロシア入国管理の問題であるといえることができる。

しかし、黒竜江省国境地区では人口が増加し、ロシア極東国境地区では人口が減少するという人口状況は国境地区の局地的交流に対し、黒竜江省国境地区とロシア極東国境地区に異なった影響を与えようと思われる。

黒竜江省国境地区では、経済交流の面で影響が予想される。この

地区の貿易に占める対ロ比率が高いため、ロシア極東地域および極東国境地区人口の減少は、輸出市場の縮小という形で辺境貿易に影響を与える。現在、黒竜江省国境地区からロシア極東国境地区への輸出は、住民の生活物資（日常生活品、食料品など）が主なものであり、この内、日常生活品の多くは国境地区ではなく、中国東部で生産されたものである。国境地区では辺境貿易効果をねらって輸出向けの消費財生産基地を建設しようとする動きもあるが、ロシア極東地域における市場縮小の可能性はこの構想に対しても制約要因となる。

これに対し、ロシア極東国境地区では、人的交流の面で影響が予想される。この地区の急激な人口減少は、労働年齢人口の減少と人口高齢化を引き起こしており、それを補う一つの方法として大量の外国人労働力の導入に対する期待が高まっている。しかし、外国人労働者の大量受け入れは、ロシア極東国境地区における外国人労働者、特に中国人の存在感をこれまで以上に高めることを意味しており、ロシア社会に一層の緊張感を与える可能性がある。（ひらいずみ ひでき／アジア経済研究所地域研究センター）

《参考文献》

- ① 黒竜江省漠河市政府「辺境貿易」<http://www.hlmohe.gov.cn/html6/bmnh-binyu1.htm>
- ② 黒竜江省志編纂委員会『黒竜江省志』哈爾濱、黒竜江人民出版社、一九九七年。
- ③ 黒竜江省志編纂委員会『對外經濟貿易志』哈爾濱、黒竜江人民出版社、一九九七年。
- ④ Виктор Ларин “Посланыи Поннебесной на Дальнем Востоке : ответ алармистам.” *Диалогы*, No.23, 2001.
- ⑤ 平泉秀樹「『市場化』過程におけるロシア極東地域経済の構造変化と人口変動」平泉秀樹編『東北アジア地域における経済の構造変化と人口変動』所収、明石書店、二〇〇六年。